



今年の花冷えが続き、桜が長く楽しめました。花見を楽しまれた方も多かったのではないのでしょうか。

■■■ 今号の記事 ■■■

- |         |          |
|---------|----------|
| ・教養講座要旨 | ・大会・総会案内 |
| ・研究部会報告 | ・教養講座案内  |
| ・会員寄稿   | ・掲示板     |

教養講座 要旨

第8回講座：2009年11月28日(土)開催  
『非行とは何か』

[1984文 藤野京子・  
早稲田大学文学学術院]

1. わが国の戦後の非行動向

第二次世界大戦以降のわが国の非行を振り返ってみると、時代によって、随分と質の違った非行現象がうかがえる。①昭和26年にピーク(第一のピーク)となった敗戦後の物質的困窮と社会的混乱を背景とした生き延びるための非行、②昭和39年にピーク(第二のピーク)となった敗戦からの急速な経済的復興の中、物質的には豊かになったものの社会の歪みも露呈したことを背景に、その歪みに対する怒りからの非行、③昭和58年にピーク(第三のピーク)となった一億総中流化して誰もが躍起にならなくても生きていける時代を背景に、マンネリ化しがちな生活の中で刺激を求めて、つまり自分達なりに面白い生活にしようとしての非行、などである。

学際的な研究が活発化してきた昨今、非行・犯罪の研究分野でも、各分野の既存の諸説を網羅的にとらえようとの動向がうかがえるが、たとえばAndrews & Bontaは、①非行・犯罪に対する促進要因や抑止要因等のその個人が置かれた非行・犯罪に至る直前の状況、②資質、物事に対する捉え方や信念、日ごろの行動といった個人レベルのもの、③親子関係、遵法的な他者との結びつき、反社会的な他者との結びつきを含めた対人関係レベルのもの、に加えて、④その個人が属している地域社会のみならず社会構造や

文化的要因を含めたより広い文脈、をも総合的に勘案すべきであると主張する「個人的、対人関係的、コミュニティ強化理論(A Personal, Interpersonal and Community-Reinforcement Perspective (PCI-R))」を提示している。心理学では、時空を超えた普遍的な人間の特質を解明しようとする傾向があるが、犯罪・非行に走る人の心理の理解に当たっては、上述のように、そして「非行は世の鏡」とも言われるように、その個人を取り巻く文脈を理解することが肝要である。

2. 非行に走る昨今の子どもたち

第三のピークのころには、「暴走族」や「つっぱり」に象徴されるように、自らを「非行少年」とみなし、それらしい外見を装いながら非行に走っていた者が多かったが、こうした様相は昨今すっかり姿を潜めている。外見から非行少年かどうかを見分けるのが難しくなっていることに加えて、非行に走っている当事者自身も自らを非行少年とみなしておらず、非行少年と一般少年との境がボーダレス化するに至っている。

昨今の非行の特徴をよく表している事例としては、①学習障害を有しており協調的に振舞うことが苦手なため周りから疎んじられるばかりであった少年が、人と一緒に行動できる場を作ろうとして放火に至ったもの、②長年いじめられたり孤立させられてきたりした少年がやっと仲間に入れてもらえるようになった状況下、その仲間の一人が金銭面での問題を抱えたことから、それを助けようとして強盗に至ったもの、③些細な逸脱が警察に発覚され、そのことでの親の叱責を恐れて家出が始まり、状況



講演を聞きながら資料に注目する参加者

が悪化の途をたどるにもかかわらずそれに歯止めをかけられず、捨て鉢な気持ちになっては強姦までも行ったもの、④学業面での伸び悩みを感じた少年が車の運転の面白さに取り付かれたとして、車を窃盗しては無免許運転して何台も廃車にさせ同乗者にも怪我を負わせたもの、などが挙げられる。

自らの非行について「社会が悪い」などと、社会に反発すべく非行をしているとの意識はあまり見出せない。「なぜか自分は社会から落ちこぼれてしまった」との生活感情を抱くにとどまっている。成熟化社会となり、問題視されている現象に対しては、根治されてはいないものの表面的な対策は講じられている社会であるがゆえに、社会適応できないことの責任を個人に帰属せざるをえなくなっているのかもしれない。

さらに、彼らに共通するのは、是が非でも、生き抜こうとの強さを供えていないことである。うまくいかなければ、捨て鉢になるだけである。中には、生きづらさをしっかりと自覚する以前に、お手上げといった感じで行動化してしまっている場合も少なくない。無気力で稚拙な、さらに反社会的というよりは非社会的な少年が非行に走るようになっている。自らの人生に自分で責任を持って生きていこうとの気概はうかがえない。バブルの崩壊以降、閉塞感・不透明感が漂い、明るい展望が抱けない社会風潮が遠因しているのであろうか。

また、社会に十分に適応できていないと感じる者同士が徒党を組むことも少なくなってきた。コンピュータや携帯電話が一般人の生活に組み込まれ、人間疎外が進んでいるが、非行に走る者の間にも、そうした影響があるのかもしれない。

## 会員寄稿

『卒業してから・・・』

[1965文 山田 征子]

昨年秋、久しぶりのホームカミングデイに参加しました。今回は、大隈講堂時計台の裏側も案内してもらい、知らない早稲田大学の姿がまだまだあるように思いました。また、在学当時よりかなり縮小された大隈庭園の片隅に移築された茶室で茶会があり、一服頂戴しました。

私は、卒業後関西に移り、生まれたときからの生活の場であった東京よりも、六甲山を眺めて暮らす日々のほうが長くなりました。子育てが一段落したところで、平均寿命がのびた現在、長く楽しめるものはないかと考え、二十代に少し経験したことのある茶の湯の稽古の再開を思い立ちました。人生を重ねてから接した茶の湯は、昔とは異なる空間と時間を与えてくれ、現在、小学生と中学生の男子を含めた人々とともに楽しんでいきます。

ところで、茶の湯は、実際に茶を点てそれを喫する行為がなくては成り立たないのですが、その行為を成立させるさまざまなことを研究対象とする、「茶の湯文化学会」が1993年に発足しました。その影響もあり、研究対象として茶の湯を見ることにより、現在の茶の湯、そしてその将来をより深く考えることができるのではないかと考え、60才のとき、神戸大学人間総合研究科日本文化論の前期過程に入学しました。未知の分野ではありましたが、かえって新鮮であり、発想もより自由になれたのではないかと考えています。しかし、論文を書き進めていく過程で、心理学のレポートや卒論で経験した方法論が、研究により客観性を持たせようとする上で大変役に立っていることに気がつきました。また、それぞれの分野の専門家による講義は、学部時代とは違ってこの上もなく貴重なものでした。それに、院生たちとの飲み会は、現在でも続いていることの一つです。このような、長かった専業主婦からの突然の環境の変化に戸惑いつつも、家族の理解に恵まれて修了することができました。

さて、茶の湯と心理学の関係については、茶道家で心理学者の岡本浩一氏の「心理学



神戸大学修士課程  
入学式での筆者

者の茶道発見」(淡交社)、また、安西二郎氏の「茶道の心理学」(淡交社)に見ることができます。茶の湯の先人が経験則で継続してきたことを心理学的にとらえた興味深い書物ですので、ぜひ読んでみてはいかがでしょうか。また、茶を喫することに細心のこだわりを持たせた茶の湯を、少し時間をかけるつもりで実践、継承して下さる方が一人でも多くなることを願っています。

## 研究部会報告

『精神生理学研究部会』

[1973文 市原 信]

### 第61回研究会

日時 : 2009年8月7日(土) 15:30-17:00

場所 : 早稲田大学スポーツ科学部

精神生理学実験室(570室)

演者 : 玉置應子先生(早稲田大学スポーツ科学学術院)(日本学術振興会特別研究員)

演題 : 視覚運動学習における睡眠の効果

発表要旨 :

新しく獲得した視覚運動技能は、夜間睡眠後に向上することが示されている。ノンレム睡眠中に主要な脳波活動の1つである睡眠紡錘波が、この向上に関与する可能性が指摘されている。本研究会では、睡眠を介した運動パフォーマンスの向上と、その向上における睡眠紡錘波の関与についての研究成果を報告した。

まず、新しく獲得した技能と既に獲得している技能の学習における終夜睡眠の効果を検討した結果、睡眠は新しく獲得された視覚運動技能の向上に効果のあることが示された。次に、睡眠紡錘波をslow spindleとfast spindleの2種類に分類し、それぞれの活動性と手続的記憶の定着との関連を検討した。運動技能課題の向上率が高いほど、fast spindleは高密度、高振幅、長持続であり、学習夜では学習をしなかった夜の非学習夜よりも、高振幅、長持続であった。一方でslow spindleの活動性と運動技能課題の向上の間に有意な関係はみられなかった。このことから、2種類の睡眠紡錘波の中でもfast spindleの活動性が手続的記憶の構築に関与すると考えられた。さらに、sLORETA(Standardized Low Resolution Brain Electromagnetic

Tomography: Pascual-Marqui, 2002)を用い、学習に関連したfast spindle活動性増大の脳内発生源を推定したところ、左運動前野と左頭頂連合野に推定された。いずれの部位も視覚運動学習に関与することが分かっており、睡眠中にはこれらの部位において可塑的な変化が生じている可能性が示唆された。

以上より、睡眠は視覚運動学習において効果的であること、fast spindleがその学習に関与することが示された。

### 第62回研究会

日時 : 2009年12月19日(土) 16:30-18:00

場所 : 早稲田大学スポーツ科学部

精神生理学実験室(570室)

演者 : 正木宏明先生(早稲田大学スポーツ科学学術院)

演題 : 行為と結果の随伴性と事象関連電位

発表要旨 :

今回、ギャンブリング課題遂行中に観察される刺激前陰性電位(affective-motivational stimulus-preceding negativity: SPN)の生起要因として「行為と結果の随伴性(action-outcome contingency)」が重要であることを報告した。近年、報酬予期に線条体が関与することはfMRI研究等で明らかにされている。Tricomi et al. (2004)は単純なギャンブリング課題を用い、自分の意思で反応選択できる条件と、予め決められた反応しかできない条件を比較した。その結果、前者の条件でのみ成立する「行為と結果の随伴性」によって尾状核が顕著に賦活することを示した。そこで本研究では、同様のギャンブリング課題を用い、情動-動機づけSPNを測定した。SPNは右半球で優位に出現し、行為と結果の随伴性によって増大した。この結果は、右島皮質と線条体に起因したものと考えられた。以上です。

\*\*\*\*\*



佃島の桜を中央大橋から臨む

『老年学研究部会』

[1972教 谷口 幸一]

<2009年度の活動報告>

平成21年度の老年学部会の活動状況を報告します。

本年度は、例年通り、奇数月に1回の割合で、定例研究会を開催しました。今年で既に6年目に入り、会員同士の気心も知れて、お互いに自由闊達な議論ができるようになりました。今年からは、前年度まで足掛け3年を要した「高齢者の生き方事例集」の発刊に引き続き、人生のおよそ三分の一を占めるようになった定年退職後の生活、すなわちサードエイジに如何にソフトランディングしていくかの課題意識から、「定年退職者の生活適応に関する調査」を企画実施しようということになりました。そのための文献の整理や調査アンケートの内容の検討を進めてきました。

その検討を踏まえて、2010年度上半期には、実際に60歳代の団塊の世代を中心に、調査を実施することにしています。戦後生まれの世代が、遂にサードエイジの時期に突入しようとしている現代において、戦前生まれの世代の人生観、生活観、老後観も変化してきていると思われれます。心理学の分野では、米国の研究者、ライチャードやニューガーデンらの老後の生活適応の類型化を試みた研究はありますが、心理学の立場から、日本人独自の老後の生活適応の類型化を試みたものは見あたりません。本研究部会では、数千人規模の調査サンプルを集めて、この試みに挑戦してみようということになりました。このような研究に関心をお持ちの皆様の参加を募ります。また、次年度の新たな試みとして、もう一つの実践研究も企画しています。それは、子ども世代に、人が老いゆくプロセスを感得させるための「エイジング教育」の活動です。そのための教材作りや、実際に学校や幼児の保育・教育の場に赴いて、子どもや生徒達と触れあう企画です。このような試みに関心をお持ちの早稲田大学心理学会の会員の皆様（年代不問）の参加を募ります。

本部会(幹事)の事務局:東海大学健康科学部、谷口幸一研究室(電話:0463-90-2010)、  
 国士舘大学政治経済学部、所正文研究室  
 (電話:03-5481-5426)

<2009年度の活動状況>

開催年月日	時間帯	開催場所	話題提供者のタイトル (話題提供者)	参加人数
2009/5/19 火曜	18:00 -20:00	国士舘大学 世田谷校舎 6号館2階	年度計画の検討 (全員)	8人
7/21 火曜	18:00 -20:00	同上	定年退職後の生活 適応 (話題提供:谷 口)	7人
9/15 火曜	18:00 -20:00	同上	定年退職者の生活 適応に関する 調査内容の検討 1 (全員)	6人
11/26 木曜	18:00 -20:00	同上	会員報告1 (中村) 会員報告2 (坂井)	7人
2010/1/28 木曜	18:00 -20:00	同上	定年退職者の生活 適応に関する 調査内容の検討 2 (全員)	6人
3/7-8 日曜 -月曜	宿泊研 修会	富士山中 湖畔ホテル	定年退職者の生活 適応に関する 調査内容の検討 3 (全員)	6人

<2010年度 老年学研究部会の活動予定>

正式な日程は、まだ決まっていますが、今年度同様に、奇数月の5月、7月、9月、11月、1月、3月の原則して第四木曜日の午後6時~8時、国士舘大学世田谷校舎(小田急線梅ヶ丘駅下車)を予定しています。研究会の後の食事会、年度末の宿泊研修会も定例となっています。新規会員のご参加をお待ちしています。

\*\*\*\*\*

『障害児研究会』『マスコミ研究会』は現在休止中です。



サンフランシスコの路面電車

## 大会・総会案内

第34回早大心理学会大会を下記のとおり開催します。近年社会的に関心が高まっている「うつ」について、著書「ネガティブ・マインド」が注目の坂本真士先生に、その仕組みや対処法の紹介も含めて講演いただきます。ご友人をお誘いの上、奮ってご参加下さい。

日時: 2010年6月19日(土) 15時～17時  
講師: 坂本真士氏 (日本大学文理学部心理学教授)  
演題: ネガティブ・マインド ～うつを知って、うつと付き合い～  
場所: 文学部34号館453教室

懇親会: 2010年6月19日(土) 17時15分～19時15分  
場所: フェニックス(早大・戸山キャンパス・正門脇・フェニックスビル2階)

\*\*\*\*\*

あわせて2010年度総会を下記のとおり開催します。会員の皆様はぜひご出席下さいませようお願い申し上げます。またご欠席の場合は同封の委任状をご提出願います。

日時: 2010年6月19日(土) 12時30分～13時30分  
場所: 文学部第二研究棟5階 第5会議室

## 教養講座案内

会員の交流と社会への情報発信を目的に開催している教養講座。早大心理学分野の卒業生が心理学にとどまらない社会活動について紹介し、会員や一般参加者と少人数で自由な雰囲気の中意見交換を行っています。

4年目の今年は下記の2テーマで開催します。堅苦しく構えずに幅広いテーマに親しむことができます。事前申込み不要ですので気軽にご参加下さい。

第9回「会社でこんなに役立つ 心理学」  
日時: 2010年5月22日(土) 16時～18時  
演者: 笠原かほる氏 (ピジョンウィル株式会社・代表取締役)

行動科学を学んだことが企業活動でどのように活用できるか、体験を紹介したい。専門を直接活かせる職務からだんだん遠ざかっているのだが、それでもなお専門性に支えられ、強みとなっていることをお伝えできればと思う。

第10回「自治体における職場復帰への取り組み」  
日時: 2010年10月2日(土) 16時～18時  
演者: 木之下みやま氏 (東京都職員共済組合)

近年、精神疾患により休職した職員の職場復帰の問題が大きくなっている。東京都知事部局では精神疾患からの職場復帰支援策として1999年より職場復帰訓練制度が設けられ、心理職が中心となって復職支援を行っている。この職場復帰訓練制度の概要を中心に、自治体職員のメンタルヘルス問題に関わる心理職の活動を紹介する。

場所: 両日とも文学部第二研究棟5階 第5会議室  
資料代・お茶代として参加費を頂いております。【一般: 500円 学生: 無料 早大心理学会会員: 無料】

## 掲示板

個人の近況報告(800字程度)、著書の紹介、勉強会の案内、共同研究者の募集、同期会のお知らせなど気軽に記事をお寄せください。

連絡先: 早稲田大学心理学会  
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1  
早稲田大学文学部心理学教室内  
電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759  
担当: 木村裕、石井康智

メール: waseda\_shinri@yahoo.co.jp  
担当: 朝岡美好

書類発送元: 一般社団法人学会支援機構  
〒112-0012 文京区大塚5-3-13  
小石川アーバン4F  
電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

瓦版は早稲田大学心理学会HPでも見られます  
<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>